# 新勅撰和歌集恋部の終末部の構成

## ―原私家集からの改変とその意図―

岩崎禮太郎

### 一

『新勅撰和歌集』[1]における恋歌五（恋の歌は恋歌一から恋歌五までの五つの巻に構成されている）の巻末歌は、

題しらず　　貫之

1022 花ならではなるものはしかすがにあだなる人の心なりけり

である。

ところで、この歌の出典を探って『貫之集』を見ると、作者は貫之ではない。このことは既に契沖が、

貫之家集に、ある女貫之を歌よみと聞て心みんとておこせたる歌五首に、たひたひに貫之の返しありて合せて十首か中に、この歌はをんなとありて返し

あたなりとなたてる人のことの葉ににほはぬ花も我はさくかな

とあれは、これを貫之と載られたは誤なり

と指摘しているところである。[2]

この、貫之の歌ではなく、ある女の詠んだ歌が、『貫之集』ではどのような意味になっているかを考えてみよう。

『貫之集』[3]を見ると、この歌の前後は、次のように、贈答歌の連続、換言すれば歌問答になっている。

ちか隣なる所にかたたがへにある女のわたれるとききてあるほどに、ことにふれてみきくに、うたよむべき人なりとききて、これがよむさまいかで心みんとおもへど、いどむこころにしあらねばふかくもおもはずすすみてもいはぬあひだに、かれも心みんとや思ひけん、萩の葉の紅葉ぢたるにつけておこせたり、あはせて十首、

をんな

(1)秋萩の下ばにつけてめに近くよそなる人の心をぞみる

返し

(2)世の中の人の心をそめしかば草葉の露もみえじとぞ思ふ

女

(3)下葉にはさらにうつらでひたすらに散りぬる花となりやしぬらん

返し

(4)ちりもせずうつろひもせず人を思ふ心のうちに花しさかねば

女

(5)花ならで花なるものはしかすがにあだなる人の心なりけり

返し

(6)あだなりとなたてる人のことのはにはぬ花も我は咲くかな

女

(7)色もかもなくてさけばや春秋もなくて心のちりかはるらん

返し

(8)春秋はすぐすものから心には花も紅葉もなくこそ有りけれ

をんな

(9)春秋にあへどにほひはなきものをみ山がくれの朽木なるらん

返し

(10)奥山のむもれ木に身をなすことは色にも出でぬ恋のためなり

(右の(1)〜(10)の番号は私に付した。)

右の、『貫之集』における、

(5)花ならで花なるものはしかすがにあだなる人の心なりけり(新勅撰集に恋部の終末歌として採られている)

を中心として、その前後の歌問答の展開のありさまを見てみよう。この歌問答は歌合戦ともいうべきものになっていて、女の方から攻撃してくるのに対して、貫之は巧みに防いで応戦につとめている感がある。

(1)の歌は、「秋萩の下葉の色変りするのにつけて、変りやすい人の心を眼のあたり見る事です。」(萩谷朴氏訳[5])という意味に詠んで、「あなたの心も移ろいやすいのでしょう。」と口争いをいどんで、貫之の反応を見ようと意図している。

次に(2)の歌の本文には異文がある。「草葉に色」の本文をとれば、「あなたは世の中の人の心をひきつけて、思いの色にそませてしまわれたから、草葉を見ても、そこに色とか色の変化もおわかりにならないでしょうと思います。私が心変りをしないこともおわかりにならないでしょう。」の意となり、「草葉の露」の本文をとれば、下句が「草葉を見ても、草葉の色を染める露がお見えにならないでしょう。従って色の変化もおわかりにならないでしょう。」の意となる。いずれにしても、女の主張する勢いを貫之が押さえようとする意図で詠んでいることになる。

次に女は、(3)の歌によって、「そうおっしゃるあなたは、さては萩の葉が上葉から下葉へとつぎつぎに色変りして行くように、だんだん心変りするという事もなしに、一度に散る花のように、一度にすっかり愛情がなくなっておしまいなのですね。」(萩谷朴氏訳)とからかって貫之の心を大いに刺激して、貫之の反応を見ようとしてきた。

それに対して貫之は(4)の歌によって、「散る」こと、「移ろふ」ことを否定している。「散る」こと、「移ろふ」ことを否定するために、自分の心に花が咲くことをも否定している。すなわち、「私の心の中に花が咲くわけではありませんから、おっしゃるように色変りするとか散るとかいうこともなく人を愛するのです。」と詠んでいる。

その次に女が、

(5)花ならで花なるものはしかすがにあだなる人の心なりけり

を詠んでいる。この歌が新勅撰集、恋歌五の巻末歌に採られている

のである。

「しかすがに」は「副詞〈しか〉にサ変動詞〈す〉、助詞〈がに〉が付いてできたもの。上の事柄を〈そうだ〉と肯定しながら、もう一つの事についても判断する意を表わす。それはそうだがしかし。そうはいうものの他方では。それはそうだがやはり。そんなはずではないのに。[6]」の意味である。(5)の歌「しかすがに」は、(4)の歌の「人を思ふ心のうちに花し咲かねば」を受けて、「それはそうだがやはり」すなわち「あなたはそうおっしゃいますがやはり」の意を表わすと考えられる。そうして、この(5)の歌は、小野小町の、

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（古今・恋五・七九七）

をふまえている。(5)の歌における「花ならで花なるものは」における最初の「花」は植物の花の意、二番目の「花」は植物の花という特徴をもつものの意と考えられる。そうして、(5)の歌の意味は、「あなたは心の中に花が咲かないとおっしゃいますが、草木の花ではなくても、花の特徴をもっているのは、移り気な（あだなる）人の心ですよ。あなたはそれですよ。」ということであると考えられる。女は、とにかく貫之に浮気だというレッテルを貼ろうという作戦であろう。

次の(6)の歌において、貫之は「移り気だ（あだなり）と言いはやして下さる人の言葉のおかげで、私には花が咲くということになりますが、咲くとしてもその花はかおりのない花ですよ。はでなことを外に表わして人をひきつけるようなことはしません。」と言っていると考えられる。貫之としては、世の中のいわゆる浮気男とは違っていて、ことさらにはでに女をひきつけるようなことはしないと言おうとしているのであろう。

次に(7)の歌では、(6)の歌で貫之が「にほはぬ花も我はさくかな」と詠んだのに付け込んで、「春秋の区別なく、常に散りかわり心変わりなさるのでしょう」と攻撃したのである。

右のように女から言われたので、貫之は(8)の歌によって、「春秋を過ごしているけれども、私の心には春の花も秋の紅葉もありません。」と言って防戦に努めているのである。

その貫之の歌を受けて、女は(9)の歌によって、それではあなたは「深山（みやま）がくれの朽木（くちき）」でしょう、と言って攻撃している。

そのように言われた貫之は、(10)の歌において、「奥山の埋れ木と同じように、はでに女の気を引くような浮気男とは違った生活をしているのは、表面には表わさない恋のためです。移り気とは全く関係のない、真実の恋心をいだいているのです。」と、巧みに答えたので、この歌合戦に決着がついたのであると考えられる。

右の、貫之とある女歌人との歌合戦において、女は萩の紅葉につけた歌から始めて、貫之を花にたとえて、花の散りかわること、すなわち貫之の心の移りやすいことを指摘し強調することを意図している。それに対して、貫之は女の攻撃に対して防戦に努めながらも、最後に、自分は移り気とは全く関係のない、真実の恋心をいだいていることを詠んで、この歌合戦に終止符を打っていると考えられる。

## 二

新勅撰集における恋部の構成の大要は、それまでの勅撰集と同様に、恋の進行状態に従って配列されている。恋歌を大きく分類して「不レ逢ハ恋」「逢ヲ恋」「逢ヒテ不レ逢ハ恋」とすれば、恋歌一・恋歌二の巻には「不レ逢恋」の歌を収めている。恋歌三の巻は「逢恋」の歌から始まり、「後朝恋」の歌をも含み、「逢不レ逢恋」の歌も始まっている。そのようにして、恋歌四・恋歌五の巻には「逢不レ逢恋」の歌が配列されている。それらの「不レ逢恋」「逢恋」「逢不レ逢恋」という大きな項目による分類の中にも、歌の素材や歌人群（古歌人・近代歌人）による配列が配慮されている。恋歌五の巻、八十一首（942～1022）の後半部四十二首の構成について主題を追って見ると、夏恋（981～985）、山家夕恋（986）、寄レ煙恋（987～990）、寄レ雲恋（991～993）、寄レ木恋（994）、寄レ涙恋（995 996）、恨恋（997）、絶恋（998～1005）、寄レ糸恋（1006～1009）と続き、その次は左のようになっている。

百首歌よみ侍りけるあひてあはぬこひ　　後京極摂政前太政大臣

1010 うつろひし心のはなにはるくれてひともこずゑに秋風ぞふく

建保六年内裏歌合に　　前関白

1011 めのまへに風もふきあへずうつりゆく心の花もいろは見えけり

中納言定頼、心のうちを見せたらばと申して侍りければよめる　　よみ人しらず

1012 あだびとの心のうちを見せたらばいとどつらさのかずやまさらん

謙徳公蔵人少将に侍りける時、臨時祭舞人にて、雪のいたくふり侍りければ、物見けるくるまのまへにうちよりて、これはらひてと申しければ

1013 なににてかうちもはらはむきみこふと涙にそではくちにしものを

おなじ人まひびとにて、ちかくたちたるくるまのまへをすぎ侍りければ　　本院侍従

1014 すり衣きたるけふだにゆふだすきかけはなれてもいぬるきみかな

雪ふり侍りける夜、按察更衣につかはしける　　天暦御製

1015 冬の夜の雪とつもれるおもひをばいはねどそらにしりやしぬらむ

御返し　　更衣正妃

1016 ふゆの夜のねざめにいまはおきて見むつもれるゆきのかずをたのまば

女につかはしける　　中納言朝忠

1017 ながれてのなにこそありけれわたり河あふせありやとたのみけるかな

題しらず　　光孝天皇御製

1018 山河のはやくもいまもおもへどもながれてうきはちぎりなりけ

り

夜ふけてつまどをたたき侍りけるに、あけ侍らざりければ、

あしたにつかはしける　　法成寺入道前摂政太政大臣

1019 夜もすがらくひなよりけになくなくぞまきのとぐちにたたきわびつる

返し　　紫式部

1020 ただならじとばかりたたくくひなゆゑあけてはいかにくやしからまし

題しらず　　相模

1021 我もおもふきみもしのぶる秋の夜はかたみに風のおとぞ身にしむ

貫之

1022 花ならではなるものはしかすがにあだなる人の心なりけり

右の構成を見ると、1021の歌と最終の1022の歌とが、恋歌の部全体の終結の歌としての特別の意図をもって配置されていると考えられる。

右の1010以後の配列のテーマを考えると、〔1010と1011〕が「心の花」、〔1012〕が「あだびとの心」で、この二つのテーマは終末歌1022と密接に関連している。次の〔1013と1014〕はそれぞれ二人の女性が謙徳公に詠んで贈った嘆きの歌で、「あだ人」という語は用いられていないが、謙徳公を「あだ人」と考えての歌である。そういうわけで、1010から1014までの五首は、「あだ人」の「あだなる心」を嘆く歌であると言うことができる。次の〔1015と1016〕は村上天皇と更衣正妃との贈答歌であって、恋の贈答の微妙な味わいがあらわれている。次の〔1017と1018〕は「寄スル河ニ恋」ともいうべきテーマのもので、それぞれ男性歌人がみのらない恋を嘆く歌になっていて、〔1013と1014〕が女性歌人による嘆きの歌であるのに相対している。そして、その次には、紫式部集および紫式部日記に出ているところの、道長と紫式部との注目すべき贈答歌を置いている。それは、「あだなる人」の詠んだ歌と、「あだなる人の心」を警戒する心情を含む歌であると言うことができる。そうして、その次にいよいよ最終の1021と1022の歌となるのである。1021の歌は、恋歌全体に通ずる、しみじみとした情感の極致を詠んだ歌であり、1022の歌は、恋歌全体に通ずるところの、「あだなる人の心」の「花」を詠嘆した歌になっているのである。

## 三

この『新勅撰和歌集』の恋部の終末部を、それぞれの歌の出典である原私家集と照合してみると、次のように七箇所ほど改変が加えられていることがわかる。その改変の意図をも探りたい。

ただし、稿者はそれぞれの私家集について伝本の詳細な調査をしたわけではない。原私家集については、『新編国歌大観』、第三巻、私家集編』と『私家集大成』（『貫之集』については、その外に『日本古典全書』も）とを照合した上での立言であることをおことわりする。

改変の第一は、1012の歌である。『定頼卿集』においては第一句が「うき人の」とあるのが、ここでは「あだびとの」と改変されている。『定頼卿集』においては詞書がやや長く、またこの歌に対する返歌も載せられているのであるが、単独に取り出して勅撰集に載せ

た場合は、「あだびとの」とした方が恋の歌として理解しやすいし、また巻末歌である1022の「あだなる人」と照応するものともなって効果的になる。そういう理由で「あだびとの」と改変したのであろう。

改変の第二は1015 1016の歌の作者についてである。『私家集大成、中古Ⅰ』の『村上御集』（底本は書陵部蔵五〇一・八四五）と照合すると、「ふゆの夜のゆきとつもれる……」の前書きが「あせちの更衣」となっていて、「ふゆの夜のねざめにいまは……」の前書きが「御返し」となっている。それを『新勅撰集』で改変しているのは、贈歌の作者が天皇であると改変した方が、一般の読者にわかりやすいと考えたからであろう。（『村上御集』は『新編国歌大観』には載せられてはいない。一本だけと照合しての立言である。）

改変の第三点は、1017の作者に関してである。『朝忠集』によれば、その前の歌の前書きは「人に」とあって、この歌の前書きは「かへし」と書かれている歌であるから、この歌の作者はある女である。このことについては、『新勅撰和歌集抄』（著者は祖能）および『別本、新勅撰抄』[8]（著者不明）において指摘されていることである。それでは作者を中納言朝忠としたのは何故であろうか。思えば、この歌の前後の配列から見ると、1010 1011 1012 1013と女の立場からの恋歌が続いている。1015 1016は贈答歌で、また次の1019 1020も贈答歌である。巻末の1021 1022の恋歌全体の終結の歌と照応させるために、ここには、男性作者の歌を置いた方がよいと考えられる。そこで1017の歌を男性作者の歌と改変して、1018の男性作者の歌と続けて配列したのではあるまいか。

改変の第四点は、1018の歌である。『仁和御集』においては、第五句が「わが身なりけり」とあるのが、ここでは「ちぎりなりけり」と改変されている。『仁和御集』においては、詞書に「おなじ人にたまはせたる」とあって、更衣にお与えになった歌で、実らない恋を嘆く歌と受け取ることができるのであるが、単独に抜き出して、「題しらず」として勅撰集に載せた場合には、「ちぎりなりけり」と改変した方が、実らない恋を嘆く歌ということがはっきりすると考えたからではあるまいか。

改変の第五点は、1019の詞書を『紫式部集』における女の立場でのものを、男である道長の立場からのものに改変していることである。（1019の歌は『御堂関白集』には載せられていない。）1019の詞書を『私家集大成』の『紫式部集』によって見ると、紫式部集Ⅰ（実践女子大学蔵）においては、

夜ふけて戸をたたきし人、つとめて

となっており、紫式部集Ⅱ（陽明文庫本）においては、

わたとのにねたる夜、戸をたたく人ありときけと、おそろしさにをともせてあかしたるつとめて（注、紫式部日記〈日本古典全集〉と全く同文）

となっている。このように『紫式部集』における1019の詞書は、女性である紫式部の立場からのものになっているのであるが、『新勅撰集』における詞書は、

夜ふけてつまどをたたき侍けるに、あけ侍らざりければ、あしたにつかはしける

と道長の立場からのものに改変されている。ここはこのように改変

した方が、実際の現場において道長が積極的態度に出たということが明らかに表われるので、迫力があると考えたからであろう。

改変の第六点は、1021の歌において指摘できる。1021の歌は、『相模集』によれば次のように書かれている。

つねにしもあらぬ女どち、なが月ばかりの夜るあひて、よろづのものがたりするに、このひとも、としごろのひとにわすられて、そのなげかしさいひ、われもつねよりことに思ふ事ありかしなど、かたりあはするをりしも、かぜふくをりにありしかば、

我もこひきみもしのぶに秋の夜は
思ひいりたるにや、ものもいはねど
かたみにかぜのおとぞみにしむ

この新勅撰集1021の歌について、契沖は『新勅撰集評注』(9)において次のように述べている。

かかれはこれは女ともたちとの連歌にて、末は相模かかはりて付たるなり。君とはかの女をさしてここに入へき哥にあらす。わかこふる人人しのふ人もまたことなり。

この契沖の指摘のように、もともと女友達との間における連歌であって、「きみ」は女友達をさしているのであるが、これを新勅撰集では一首の和歌として取り上げて採っている。思うに、この歌はすべての恋の歌に通ずるところの、しみじみとした情趣を表わすのにふさわしい歌と考えて、ここに配置したのであろう。

改変の第七点は、1022の歌における作者名である。この歌は一において考察したように、歌合戦における女歌人の作であるのを、『新勅撰集』では単独に採って貫之の作と改変しているのである。それでは、どのような意図により、貫之の作と改変したのであろうか。

それを考えるに当たって、この歌が『貫之集』における場合と、『新勅撰集』における場合との、意味・ニュアンスの違いを検討する必要がある。「しかすがに」という語は、『貫之集』においては、その前の貫之の詠んだ歌の「人を思ふ心のうちに花し咲かねば」を受けて、「あなたはそうおっしゃいますがやはり」の意を表わしている。ところで、『新勅撰集』において「しか」は何をさしているのであろうか。『新勅撰集』の恋歌三には「後朝恋」の歌を含み、「逢不レ逢恋」の歌が始まる。そうして恋歌四、恋歌五の巻には「逢不レ逢恋」の嘆き、憂い、しみじみとした情感の歌が続いている。1010から1014までの五首は、「あだ人」の「あだなる心」を嘆く歌であった。また、1020の紫式部の歌では、「あだ人」の「あだなる心」を警戒する心が詠まれていた。それらを受けて「しかしながら、やはり」と言っていると考えられる。

次に「花」の意味はどうであろうか。「花ならで花なるものはしかすがにあだなる人の心なりけり」における、第一句の「花」は、『貫之集』においても『新勅撰集』においても「草木の花」の意であるが、第二句の「花」はどうであろうか。両者とも「花の特徴をもっているもの」の意に解されるが、『貫之集』においては前の歌との関連で、「移ろう」意が主となっていると考えられる。ところが、『新勅撰集』ではどうであろうか。

『新勅撰和歌集』の古注釈書(10)における、この歌の注釈を見ると、梅水堂正路は、

小町の歌に、色みえてうつろふ物は世の中の人のこころの花にそ有ける。又、伊勢物語に、あたなりと名にこそ立れさくら花とよめり。……（『新勅撰和歌集抄』〈延享四年・一七四七成立〉）

と述べ、弄花軒祖能は、

……歌意はさすかにあたなる人の心は、うつりやすきやうには見えすしていつのまにかうつろふと也。……（『新勅撰和歌集抄』〈寛政年間の成立〉）

と述べている。しかしながら、北村季吟は、

化人（アタヒト）は頼みかたけれとさすかににくからぬ故に、花なる物はと也。（『新勅撰和歌集口実』〈元禄十三年・一七〇〇成立〉）

と記している。ここに「あだびと」は「にくからぬ」と述べているのは、「好感を与えるもの」「魅力のあるもの」であることを暗示していると考えられる。そもそも「花」という語の意味は、

A　植物の器官の一つ。

のほかに、

B　花の美しく咲き栄えるさまにたとえていう。魅力のあるさま。人の心をひきつけるさま。

C　実に対して、花のあだなるさま。移ろいやすいさま。散りやすいさま。

の意味がある。第二句の「花」の意味について、右にあげた古注釈書において、梅水堂正路と弄花軒祖能とは「C」の意味に解し、北村季吟は「B」の意味に解していることが知られる。

『貫之集』においては、「花ならで花なるものは……」の歌は女歌人の作であって、第二句の「花」は「C」の意味であったと考えられることは前述した。しかしながら、『新勅撰集』においては、第二句の「花」の意味は、――(1)作者が男性であること、(2)「しかすがに」の意味が『貫之集』における前後の関係から解放されてしまって、新勅撰集恋歌五の終末部における、その前の部分の歌の意味や情感の流れを受けるのである。すなわち、「恋歌には、嘆き、憂い、しみじみとした思いが詠まれ、〈あだ人〉の〈あだなる心〉を嘆き、また〈あだ人〉の〈あだなる心〉を警戒する思いも詠まれている。しかしながらやはり」の意となることを考えあわせると、――北村季吟の言うように、「B」を主とした意味と考えられるのではないであろうか。（そうして、この歌を二度読めば、二度目には「C」の意味が受け取られるであろう。）この歌は、「あだなる人の心」が「花」のように魅力を発揮して、異性の心をひきつけるという意味を表わすものとなっている。その結果として、恋の種々相がくりひろげられるということをも暗示していると受け取ることもできる。思えば、「あだなる人の心」はこの世における魅力的な「花」なのだ。このように、1022の歌が「あだなる人の心」の魅力・影響を指摘・強調・詠嘆した歌であるとすれば、この歌の作者が女性でなくて、男性である方がふさわしいと考えて、作者を貫之としたのであろう。

## 四

ところで、『新勅撰和歌集』を編纂するに当って、恋部の終末部をいかに構成するかということも、定家にとって一つの課題であったであろう。

定家が撰者の一人であった『新古今和歌集』における恋部の終末部である恋歌五の巻末には、よみ人しらずの歌九首が置かれており、最後の三首（1432 1433 1434）は「浦に寄せた恋」の歌で、その1432 1434の歌は恨恋の歌にもなっている。そうして、それは『新古今集』の恋歌一の巻頭によみ人しらずの歌が二首置かれており、またそれ「山に寄せた恋」の歌で不レ逢恋の歌でもあるのと対応していると見ることができる。そのような対応は認めることができるけれども、恋部の締めくくりの歌としての特別の配慮をもって置かれた歌はない。『新勅撰和歌集』の単独撰者に任命された定家は、『新古今和歌集』にはないところの巧みな構成を企図して工夫したことであろう。その時にヒントを与えたものが『古今和歌集』恋部の終末部であったであろう。

『古今和歌集』の恋部の最終の二首、

題しらず　　友則

うきながらけぬる泡ともなりななむ流れてとだに頼まれぬ身は

（八二七）

よみ人しらず

流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中（八二八）

は、恋部の締めくくりの歌として特別の配慮をもって置かれた歌であると言うことができる。松田武夫氏は、この二首をさとりに似たあきらめに到達した「あきらめ」の歌群と見て、一括して考え、次のように述べておられる。[11]

第一首は、わが身は、憂い辛い失恋の痛手を負いながら、浮きながら消える泡末のように消えてしまいたい。たとえ生きながらえても、もとに復する当てもない身であるから、という歌意で、現実にも未来へも、希望をつなぎ止めることができず、失望の結果、死を思念する。ところが、この提案に対して、第二首では、それに答えるかの如く、吉野川が流れて紀の川となり、妹山と背山との間を分け距てて流れるように、男女夫婦の中は、とかく分け隔てられ易いものだと、諦観に似た心境を提示する。従って、この第二首は、第一首のみへの回答というより、飽きられ、厭われ、忘られ、仲絶えて、憂く、悲しく、わびしく、失恋の辛さに耐えかね、恨みもだえ、死まで決意する感情を表明した恋歌五のさまざまな歌全体に対する、回答とも見られるのである。更にいえば、恋歌一の巻頭歌、

郭公鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな

に呼応し、「あやめも知らぬ恋」という定義に対し、さればこそ、恋とは、妹山・背山の間を裂き流れる吉野川のように、男女夫婦の間は割り裂かれるものだと、いま一つの定義を添加しているようにも解される。かくして、恋歌一からはじまり恋歌五に終る恋歌全体に、この両歌により、首尾が与えられ、締めくくりがなされているものと考えられる。

定家は『顕注密勘』において、古今集恋部の最後の歌について、

男女のなからひをすべていひたる歌にて、恋部のはてにも此歌をばたてたる成べし。

と記している。定家はこのことにヒントを得て、『新勅撰和歌集』の恋部の締めくくりの歌として、「男女のなからひをすべていひた

る歌」として1021 1022の歌を配置したのであろう。

それでは、恋部の締めくくりの歌としての特別の配慮をもって置かれた歌として味わうならば、その意図はどのように具現されているのであろうか。1021の歌は、恋歌全体に通ずる、しみじみとした情感の極致を詠んだ歌であり、1022の歌は、恋歌全体に通ずるところの、「あだなる人」の「花」にもたとえるべき属性を詠嘆した歌となっている。

そうして、『古今和歌集』と比べると、そこにおいては締めくくりの歌が「さとりに似たあきらめ」の歌であったのと打って変って、『新勅撰和歌集』では、恋の気分情調を、1021は聴覚的に訴え、1022は視覚的イメージによって感じさせていると言うことができるであろう。

## 五

『新勅撰和歌集』という命名は、従来の勅撰集にあきたらず、新しい勅撰集の典型を示し、以後の勅撰集の規範たらしめようとする自信と抱負の表明であった。(12)

『新撰勅和歌集』の各部において、定家が構成に意を用いて、巧みに歌を配列していることについて、既に発表した五つの小論(13)においても述べた。この小論において取り上げた、恋部の終末部においては、構成意識が特に強くはたらいて、以上のよう巧みな構成が実現されているのである。

〔注〕

(1)『新編国歌大観、第一巻、勅撰集編』による。なお、久曽神昇氏・樋口芳麻呂氏校訂『新勅撰和歌集』（岩波文庫）を参考にした。

(2) 大取一馬氏『新勅撰和歌集古注釈とその研究』の中の『新勅撰集評注』。

(3)『新編国歌大観、第三巻、私家集編』による。『私家集大成』『日本古典全書』をも参考にした。

(4)『私家集大成』に「草葉の露（に色）」となっているのによった。

(5) 萩谷朴氏『日本古典全書、土佐日記・貫之全歌集』頭注。

(6) 日本国語大辞典（小学館）による。

(7) 1に同じ。

(8) この両書とも2の大取氏の著書に載せられたものによる。

(9) 2に同じ。

(10) 2に同じ。

(11) 松田武夫氏『古今集の構造に関する研究』

(12) 細谷直樹氏「勅撰集の特色と評価、新勅撰集」国文学解釈と鑑賞、昭43・3月

(13)「新勅撰和歌集における春部の構成と特質」（『新古今歌風とその周辺』所収、昭53・8）「新勅撰和歌集における夏部の構成と特質」梅光女学院大学、日本文学研究、第十四号、昭53・11「新古今集・新勅撰集における七夕の歌」同右、第十六号、昭55・11「新勅撰和歌集における秋部の構成と特質」同右、第十七号、昭56・11「新勅撰和歌集における冬部の構成と特質」同右、第十八号、昭57・11